

2. 研究の詳細

プロジェクト名	英語教師の専門的知識に関する研究		
プロジェクト期間	平成 28 年度		
申請代表者 (所属講座等)	宮迫 靖静 (英語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし
<p>1. はじめに</p> <p>エリクソン (Ericsson, A) に代表される専門知識 (expertise) 及び卓越したパフォーマンス (expert performance) に関する研究では、芸能、スポーツ等をはじめとする様々な分野における国際・国内最高レベルの演奏者、スポーツ選手等は、才能ではなく経験が育んだものである。ここで経験とは、分野にもよるが、大まかには、1日5時間程度の計画的練習・訓練 (deliberate practice) を週5日、約10年間継続することである (Ericsson, 1993, Gelder & Bissett, 2004, Ericsson & Pool, 2016)。</p> <p>また、計画的練習 (Ericsson & Pool, 2016, pp. 97 & 98) とは、芸能、スポーツ等のように、有効な練習法が確立している分野において、奏者、選手等を快適領域 (comfort zone) から追い出し、目標とするパフォーマンスに係る下位部門活動の向上を目指す練習のことである。奏者・選手等は、集中して目的活動を行い、指導者によるフィードバックに基き修正していく。これを繰り返すことにより、目的活動に関する心的表象を改善し、下位部門活動の向上を通して目標とするパフォーマンスを向上させていくのである。但し、計画的練習は基本的に独りで行うもので、楽しさには欠けるとされている。</p> <p>この計画的練習に関する知見は、英語教育及び英語教員養成には応用できないか。確かに、英語教育及び英語教員養成は、次の点では計画的練習に相応しくない。まず、有効な練習・育成法が確立していない。また、英語教育においては、練習 (practice) の有効性も疑問視されることが少なくなく、計画的練習に係る指導者は、適切な目的活動を指示し、修正フィードバックを与えるべきだが、修正フィードバックへの依存は好まれない。</p> <p>反面、快適領域からの追い出し、目的活動練習への集中、心的表象の改善等は、英語教育及び英語教員養成に通ずるものである。専門知識及び卓越したパフォーマンスに関する研究は、言語学習を極度に複雑な一般的認知学習と見なす認知心理学 (Anderson & Schunn, 2000) の延長上にあるもので、当然である。また、有効な練習・育成法が確立していない分野及び指導者がいない場合には、計画的練習の原則に基づく意図的練習が可能であり、3つの F (Focus, Feedback, Fix) が表す集中、フィードバック、修正の3要素が不可欠である (Ericsson & Pool, 2016)。</p> <p>計画的練習の原則に沿い、英語学習者及び英語教員志望者は、自律的に、己を快適領域から追い出し、学習段階に応じた目的活動に係る練習に集中し、自らフィードバック・修正することを継続すれば、目標活動に関する心的表象が改善し、英語運用能力及び英語教員としての力量の向上に寄与する可能性があるだろう。これ以降、計画的練習の原則に沿うこの意図的練習を準計画的練習と呼ぶが、この準計画的練習が英語教育及び英語教員養成に寄与する可能性は調査すべきものであり、その有効性が示されれば、実際に活用すべきである。この場合、これまで、より広範な調査研究がなされてきた英語教育から調査を始めることが妥当であると考えられる。</p> <p>2. 目的</p> <p>この研究の目的は、英語教師の専門的知識に関する研究の前段階として、英語学習における準計画的練習を吟味することであった。英語の達人の学習法における準計画的練習の有無及び実態に関して調査した。</p>			

3. 方法

(1) 資料

英語の達人の学習法分析には、学習方略の視点から達人の英語学習法をインタビューした資料（竹内，2003）を使用した。尚、英語の達人（前掲書，p. 110）とは、次の項目に該当する特異な学習者ではない高英語能力者である：(a) 日本で生まれ、(b) 12才以降に英語学習を開始し、(c) 基本的に国内で英語を学習し、(d) 日常的に英語を使用する家庭環境になく、(e) 職業で英語を使用する（教員 12，通訳者 3，会社員 2，外交官 1，計 18）。

(2) 分析

この資料（6,821 語）は、学習方略ごとにコメントが分類してあるので、達人ごとにコメントをまとめ、各コメントに見られる準計画的練習に係る箇所をコード化した：学習量大（A）、継続学習（R）、快適領域からの抜け出し（CZ）、目的活動に係る練習への集中（Fcs）、フィードバック（FB）、修正（Fx）。同時に、目的活動の内容を抜き出した。続いて、前者を量的に後者を質的に分析した。

(3) 実施体制

申請者が単独で実施した。

4. 平成 28 年度の成果と示唆

我が国の英語の達人の学習法における準計画的練習の有無及び実態を量・質的に分析した結果、主に次の三点が示された。

- (a) 英語の達人の英語学習においては、準計画的練習が相当な割合で行われている可能性がある。
- (b) 英語の達人の英語学習においては、目的活動に直接係る下位部門スキル練習が大部分を占める。
- (c) 英語の達人の英語学習法においては、SLA 研究の知見に沿うものが見られる。

これまで、英語学習に関して、専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点からメスが入れられたことはなく、英語学習に計画的練習が無縁ではないことが示されたのは、成果である。また、英語教育は、達人ではない一般の学習者を対象とするものだが、知見 (b)、(c) は、一般の学習者にも該当する内容である。さらに、計画的練習は学習者の自律 (autonomy) を求め、メタ認知に長けた学習者でなければ実施が難しいが、計画的練習の原則に基づく準計画的練習は、Fcs, Fb, Fx の 3Fs が揃うことが必要条件なので、一般の学習者に対する授業の中で比較的簡単に指導に使える。

例えば、クリッカーを使用するアクティブ・ラーニング (AL) である (Ericsson & Pool, 2016)。教師の説明に続いて、学習者にクイズをだし、グループで考えさせ (Fcs)、解答を示し (Fb)、正しく認識させる (Fx)。この AL を内容科目でなく、英語による英語授業で行えば、計画的学習の原則に沿った英語による英語授業になる。

英語の達人のような個人学習において、準計画的練習を活用して英語能力の向上を図るのは、やはり、自律的学習者でなければ難しいかもしれない。しかし、計画的学習の原則を活用する英語指導における AL は、課題解決型学習 (Problem-based Learning)・協同学習 (Collaborative Learning) の側面を有し、学習者のメタ認知育成・自律にも寄与するはずであり、やがては、個人学習における準計画的練習に繋がる可能性がある。

準計画的練習の英語授業での使用例を示したが、この他にも、英語教育に応用できる可能性があるのではないかと。専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点からも、英語教育に関する研究を続けていくべきであろう。

5. 今後の展望

英語の達人の学習法において準計画的練習が貢献する可能性が示されたことを受け、英語教師の専門的知識に関する研究に着手する。英語指導の名人を対象に調査し、英語の達人の学習と同様に準計画的練習が貢献する可能性を探っていく。

6. 主な学会発表及び論文

- ・宮迫靖静 (2016) 「英語の達人はどのように練習したのか—専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点から—」 口頭発表 日本教科教育学会第 42 回徳島研究大会
- ・宮迫靖静 (審査中) 「英語の達人はどのように練習したのか—専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点から—」

引用文献

- Anderson, J. R., & Schunn, C. D. (2000). Implications of the ACT-R learning theory: No magic bullets. In R. Glaser (Ed). *Advances in instructional psychology*, 5, 1- 27. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Ericsson, K. A., Krampe, R., & Tesch-Römer. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100, 366-406.
- Ericsson, K. A., & Pool, R. (2016). *Peak: Secrets from the new science of expertise*. Boston: An Eamon Dolan Book.
- Gelder, T., & Bissett, M. (2004). Cultivating expertise in informal reasoning. *Canadian Journal of Experimental Psychology*, 58, 142-152.
- 竹内理 (2003) 『より良い外国語学習法を求めて 外国顔学習成功者の研究』東京：松柏社